

英語絵本を読める喜びを学びにつなげる 多読教材を用いた小学校の英語教育の実践

Enjoying Reading and Learning English — The Practice of Extensive Reading in Elementary School —

立石 喜美子

要旨

北陸学院小学校では、2017年度より英語の絵本である多読教材Oxford Reading Tree（以下ORT）を導入した。今年度の6年生はORTを使用し5年目、5年生は4年目となる。児童は、絵本の内容や登場人物について楽しそうに話しながら読みたい絵本を選んでいる。また、辞書を引かずに絵を見ることで、新しい単語を知り、読める単語の量が増えている。この実践研究報告では、多読教材を用いた小学校英語教育の実践と内発的動機づけについて報告する。

キーワード：小学校英語（English education in elementary school）／多読（extensive reading）／
内発的動機づけ（intrinsic motivation）

I 問題と目的

2020年度新しい指導要領がスタートし、これまで外国語活動だった英語が外国語科となった。本校は、これまでも英語は外国語科として授業をおこなってきており、2021年度現在、1・2年生で週に1時間、3・4年生で週に2時間、5・6年生で前期に週に2時間、後期に週3時間、日本人とネイティブの教員で英語の授業を行っている。1年生から授業はネイティブと日本人教員で行っており、継続してネイティブの発音を聞いているため、リスニングにおいては得意としている児童が多い。

表1 2018年度6年生GTEC Junior Plus平均スコア

	平均スコア
トータル	448.1/560
聞く力	128.2/140
読む力	115.2/140
話す力	97.7/140
書く力	107.0/140

表1は、2018年度1月に6年生（10名）を対象に実施したGTEC Junior Plusの平均スコアである。GTEC Junior Plusは、中学1年生の範囲の語彙で出題される「スコア型英語4技能テスト」である。聞く力では、平均で9割以上のスコアを取得している。中学1年生の範囲の語彙であっても、高いスコアを取得できることから、リスニングを得意としている児童が多いことも分かる。

2020年度、新しい指導要領がスタートした。本校でも、授業以外で、さらに耳や目から自然な英語に触れる時間を増やすことで、より英語に親しみをもって学習する環境を整えることができないかと考えた。また、英語の学習は、中学校、高校、大学と継続して行われていくため、特に英語が苦手、嫌いな児童がより楽しみながら学習することができないかと考え、2017年度から多読教材であるOxford Reading Tree（以下ORT）の英語絵本を約100冊取り入れることにした。

ORTは、イギリスの約80%以上の小学校で採用されている国の教科書である。主人公はキッパーという少年とその家族や日常が描かれており、レベル1～9までである。

ORTを採用した理由は、幅広いレベルがあり、

登場人物が繰り広げる物語が、学校生活のことなど児童に親しみのある内容、遊びや生活においても、発達段階に応じた内容で児童が楽しめると考えたからである。また、グレード別になっていることで、学年ごとにグレードを指定できること、児童自身が自分の読めるレベルを把握し、自分が読める本を選べるからである。

児童用の英語の絵本は児童向けの絵や内容ではあるが、見たことのない単語がたくさん出てきて、小学生の子どもはとても難しく感じてしまう。中学生、高校生になると、ある程度の英語を読めるようになるので、児童用の絵本を読むことはできるが内容が幼すぎて十分に楽しむことは難しい。年齢に応じた内容をもつ英語の絵本を楽しみながら読むことで、「もっと英語で読んでみたい」という内発的動機づけを高め学びにつなげていけるのではないかと考えた。

オーディオがあるため、家庭でも音声を聞いたり、聞きながら音読をしたりできる。そのため、宿題として課することもできた。

2018年度には、300冊のCD付きのORTの本を購入し児童が読みたい絵本を選んで読むことができる環境を整えた。1年生は絵本をCDで聞くことから始めている。2021年度現在は475冊のCD付きの本があり、今年度6年生は5年間、5年生は4年間、英語絵本を使って学んできたことになる。この実践研究報告では、5年間英語絵本を取り入れて学んできた6年生と4年間学んできた5年生に焦点をあて、多読教材を用いた学習の取り組みと、多読教材への取り組みに対する児童の学ぶ意欲、内発的動機づけ、との関連について報告する。

II 方法

ORTの絵本のレベル1+～6を使用した。学年でレベルを決めてはいるが、2021年度は全学年でレベルの幅を持たせ、CDを聞いて自分が読めるレベルの本を読んでいる。1週間に1冊、毎週違う本を持ち帰り、週に最低5回は音読したり、本を見ながら聞いたりする。夏季・冬季休業時には1冊を20回音読したり、本を見ながら聞いたりする。毎年1～6年生まで平均して、年間20冊の本を読んでいる。また、2021年度は5年生で、

Oxford Reading Clubというデジタル教材も用いた。

夏休み明けには、クラスで音読発表会を行っている。練習の回数や、練習の成果によって代表者を決め、その代表者は毎年10月にある学習発表会で発表している。

絵本音読を継続して取り組んだ児童へのインタビュー、家庭での取り組み方について保護者への質問紙調査、児童への質問紙調査をおこなった。質問紙調査は、4件法で行った。中点2.5より高ければ、当該項目に対し肯定的（強い）傾向が示されていると考える。

III 児童の実態

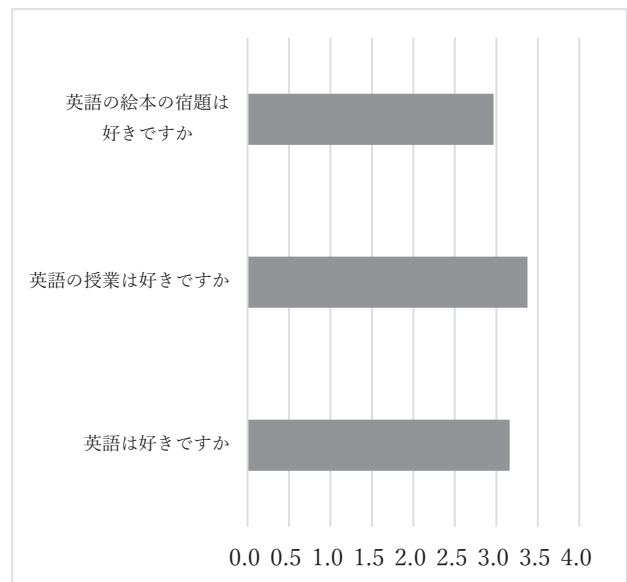


図1 英語について 質問紙調査結果

図1は5、6年生（35名）に英語と英語の絵本についての質問紙調査を行った結果である。

「1.英語は好きですか」、「2.英語の授業は好きですか」、「3.英語の絵本の宿題は好きですか」という3つの問いに対する結果である。

「英語は好きですか」の項目は3.16、「英語の授業は好きですか」の項目は3.37だった。

英語に対して肯定的に捉えている児童が多い。授業の中でも、児童がよく日本語で使用しており、英語では何というかわからない単語に出会ったときには、質問をしたり、熱心にメモをしたりする児童が多くいる。

5年生の授業の導入として、ある場面を描いて

いるポスターを見せ「I see a ~/ ~s.」の文章でモールドークの時間を取った際のことである。そのポスターは公園での一場面が描かれており、自転車に乗った子供たち、三輪車に乗った幼児、ランニングをしている人、ダンスをしている人などが描かれていた。自転車のことを「bike」ということは、5年生ですでに知っているが、児童がよく目にする三輪車は何というか知らない。triangleと関連付けて「tricycle」と知ると、「じゃあ一輪車は何というの?」と興味津々になっていた。

また、大文字、小文字をこれまでbig letter、small letterと言っていたが、6年生の教室で「capital letter (upper case)」とも言うことを教わると、「じゃあ小文字は?」という質問もでて「lower case」という言葉も知り、今では使えるようになってきている。普段の授業でも、できるだけたくさんさんの語彙に触れることができるよう、学校での出来事、給食や行事のことなどについて、英語でやり取りをする時間をとっている。その際の子どもの様子からも、身近なものに対して英語を使うことへの関心は非常に高い集団であると言える。

質問紙調査の英語で何ができるようにになりたいか、という項目には

- ・将来、仕事などで困らないようにになりたい
- ・外国の方と気軽に話せるようにになりたい
- ・英語で会話ができるようになりたい
- ・英語でいろんな会話ができるようになりたい
- ・外国人と話せるようになりたい
- ・色々な単語を覚えられたらなと思います。また、少しでも他国の方と会話ができたらなと思います
- ・留学をして、みんなと英語で話せるようになりたい
- ・英語がある程度喋れるようになりたい
- ・話せるようになりたい
- ・海外の人と話すくらいになりたい
- ・海外にいる家族と、もっと話せるようになりたい

という回答があった。「会話」ができるようにな

りたいという回答が多く、英語を使って他者とやりとりをしたいと考えている児童が多いことが分かる。

IV 多読教材ORTを用いた実践

1 児童と保護者におけるORTの取り組みへの認識

6年生は、2年生からORTを取り入れ、今年度で5年目となる。ORTにはすべてCDを付けており、1・2年生は絵本を見ながら聞くこと、3～6年生はCDを聞きながら、リピートしたり、シャドーイングしたりすることを宿題にしている。

1年生はレベル1+, 2年生はレベル2、3年生はレベル3、4年生はレベル4、5年生はレベル5、6年生はレベル6の本を主として選べるようにしているが、全ての学年にレベル1+からの本も選択できるように置いており、自分が読めそうな本、読んでみたい本を選べるようにしている。毎週火曜日を絵本の交換日としており、児童は1週間、家庭で練習している。

練習してきた後、授業中では、1～3年生は代表者として前に出て発表したり、ビッグブックを用いて読み聞かせを行ったりしている。4～6年生はペアになり、1週間練習してきた本をお互いに読み合っている。

図1にあるように、児童の絵本に対する質問、「英語の絵本の宿題は好きですか」という項目は2.96という結果となった。

絵本が好きな理由として挙げられていたのは、

- ・英語を物語で面白く楽しく学べるから
- ・絵と文を比べ合わせて、単語の意味を考えるのが楽しいから
- ・英語の絵本を読むことで、自分が知っている以上の言葉や、単語が知れるから
- ・やると上手になるから
- ・CDを聞くことで正しい発音を何度も聞くことができるから

といった絵本から言葉を学んでいる実感をもって

いる内容や

- ・本の絵を見るのが好き
- ・絵本のストーリーが面白いから
- ・物語がつながっていて面白いから

といった、物語の内容に興味をもった内容もあった。

絵本があまり好きではない理由として、

- ・難しくてよくわからないから
- ・なんとなく学習しているなど感じるから
- ・面倒くさいし、大変だから

といったことが挙げられていた。多読教材を「難しい」と感じたり、負担に感じたりしている児童もいる。

- ・家のCDプレイヤーが使いにくいから

という機器に関する理由もあった。

図2は児童に対する英語絵本の質問紙調査の結果、図3は保護者に対する英語絵本の質問紙調査の結果である。

ORTを宿題としていく中では、保護者の協力は不可欠である。そのため、保護者には、家庭学習の様子について質問した。

保護者の中には、レベル1+の本から過去形が出てくるため「難しすぎるのではないか」、「意味が分かっていないようだ」という、不安の声もある。質問紙調査の結果では、保護者の「英語の絵本を読むことを楽しんでいる」の項目は2.50だったのに対し、児童の「絵本を読むことは楽しい」は3.07だった。また、保護者の「絵本の内容は大体理解しているようだ」の項目は2.86だったのに対し、児童の「読んでいる絵本の内容はだいたい分かる」は3.37である。

以上の2点、また、英語絵本が好きな理由から、児童は保護者が思っている以上に絵を頼りに本の内容を理解し、楽しんでいることが分かる。

「継続して聞いたり、読んだりしていることが力になっていると思う」の項目では、児童も保護者も比較的に高いポイントとなり、保護者の3.00、と児童の「4年前よりも、読める単語や知っている単語が増えている」の3.90である。

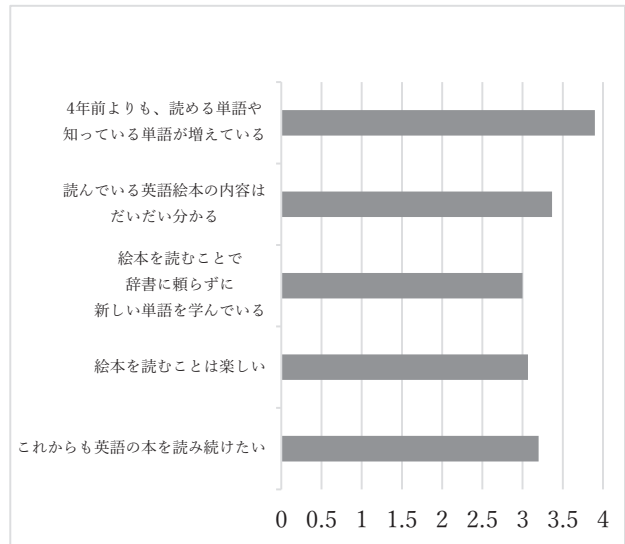


図2 英語絵本についての質問紙調査結果(児童)

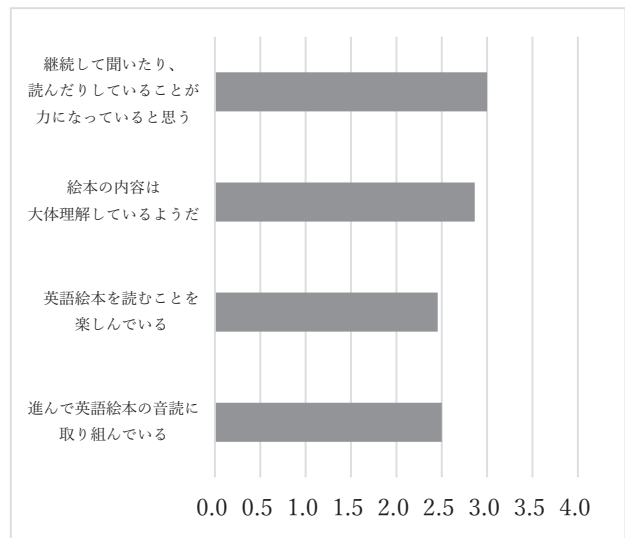


図3 英語絵本についての質問紙調査結果(保護者)

児童は、自分の成長を感じながら取り組んでおり、その様子を見ている保護者も児童の英語力の成長を実感している。

2 レシテーション

2018年度から、本校では、夏休み中に1冊を「覚えるくらい音読して練習すること」を宿題にし、夏休み明けにはクラスで全員発表している。目標は自分で設定するため、覚えることができる児童もいれば、すらすらと音読することを目標に練習する児童もいる。この発表では、練習の成果が明らかになるため、努力と成果を評価して、毎年10月末に行われる学習発表会のレシテーション発表者を決めている。

5年生のレベル5や6年生のレベル6の本は

ページ数も多くなり、文字数も増えるため覚えるのは簡単ではないが、今年度は5年生でも6年生でもチャレンジし、全て覚えた児童がいた。

「代表者として選ばれたい」という思いが動機付けとなり覚えた児童、以前代表者として選ばれたことがきっかけとなり、絵本が好きになった児童だった。

これまで代表者として選ばれた児童の中には、英語があまり好きではない児童もいた。好きではなくても、何度も練習して覚え、レシテーションでは堂々と発表した。

人前で発表することがもともと苦手だったため、学習発表会本番前日に、緊張と腹痛が出てしまい保護者も心配する中だったが、本番は無事に発表できた。大きな緊張を乗り越え、その後の学校生活の中では、人前での発表に大きな困難を覚えることなく取り組むことができている。

3 デジタルブック

2020年2月からの新型コロナウイルス感染症の流行により、文部科学省のGIGAスクール構想の取り組みが急速に進められた。本校も、2021年3月には一人一台の端末を配布し、児童にとってよりよい学びにつながる使用法について模索している。児童は自分の端末を家庭でも使うことができる環境となった。そこで、5年生では夏休み前後にかけて、Oxford Reading ClubというORTのデジタル教材を用いた。デジタル教材では紙の本とCDだけではできない以下のような機能がある。

- ・1000冊以上の本から選択できる
- ・本がターゲットにしている語彙のクイズや内容のクイズが出題される
- ・自分の声を録音して聞くことができる
- ・聞きたい単語の発音だけを聞くことができる
- ・教員の管理画面から児童の学習状況を確認できる

夏休み明けに、児童に紙の本とデジタル教材のどちらが好きか尋ねてみた。結果は図4のようになった。

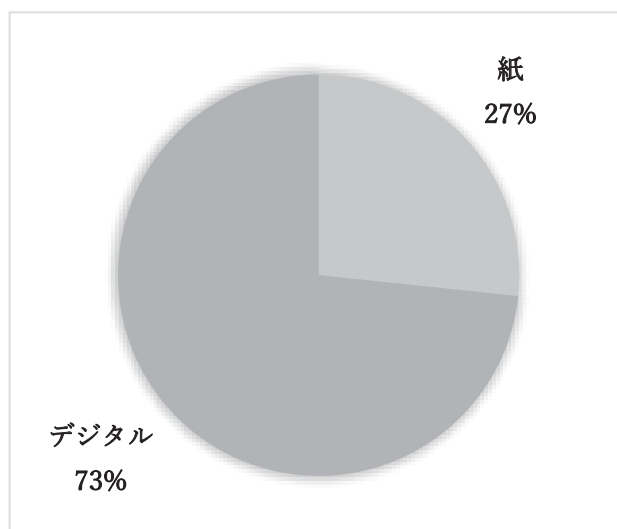


図4 紙の本とデジタル教材のどちらの本が好きですか

デジタル教材が好きと答えた児童が73%、紙の本が好きと答えた児童が27%だった。

デジタル教材が好きな理由として

- ・CDプレイヤーは細かい巻き戻しができないけど、デジタルブックは分からない場所をすぐ聞け、細かい巻き戻しができるから
- ・録音ができ、発音の練習ができるから
- ・録音機能、マンスリーレポートなどがあり便利だから
- ・ゲームやパズルのようなものがあるから、紙の本ではできないことがたくさんあるから

などが挙げられていた。

紙の本が好きな理由としては、

- ・自力で読んだり聞いたりして、覚えることが楽しいから
- ・紙の本の方が慣れているから

などが挙げられていた。

デジタル教材は紙とCDではできない多くの機能を持ち合わせており、それらを児童も「便利」と感じて使用していた。教員も管理画面で児童の学習状況をいつでも把握でき、声をかけることもできた。

しかし、デジタル教材は毎月費用がかかる。本は一度購入すれば、破れたり色褪せたりして読めなくなるまで使用できるが、デジタル教材は毎月

の費用を払わなければ使用できない。そのため、大きな費用がかかってくることは避けられない。予算が決められた中で、継続して取り組んでいくには、計画的に使用していく必要がある。

V 結果と考察

ORTを取り入れて5年目となる。継続して取り組むことで、読むことができる語彙が増えてきていることを実感している児童は多い。また、語彙が増えてくることで、絵本の楽しさに気づき「次は、どの本を読もうか」と週に一回の絵本の交換を楽しみにしている様子も見られる。

図2にある「これからも絵本を読み続けたいか」という質問項目は3.2であった。理由として以下のようなことが挙げられていた。

- ・発音が身につくから
- ・CDを聞くことで正しい発音を何度も聞くことができるから
- ・たくさんの言葉を知りたいから
- ・新しい単語を覚えられるし、書くのが苦手だったりするので、とくいになりたいと思うから
- ・本が面白いし、発音もよくなるから
- ・少しでも多くの英語を知りたいから
- ・新しい単語や文を知れるから
- ・楽しいから
- ・単語の知識を増やしたいから
- ・色々な面白い本があるし、新しい単語を学べるから

絵本を楽しめるから、新しい単語を学べる、など期待をもちながら、今後も読み続けたいと思っている児童が多い。

エドワード・Lデシらは、人が自らを意欲的にする内発的動機づけを維持するためには、「自分が有能であり、自律的であるという感覚をもつ」が必要であり、また「効果的で自律的でありながら、他者と結びついていたい」という思いにも支えられていると述べており、「自律性への欲求」、「有能さへの欲求」と「関係性への欲求」が満たされた結果、内発的動機づけられると主張している。¹⁾

多読教材の実践は、自分で読んでみたい絵本を選び、その本のページをめくり、絵本の世界を楽しみながら、語彙の幅を広げられる環境のひとつとなっており、児童の自律性、有能さへの欲求を満たす要素がある。また、本校ではオーストラリアに姉妹校があり、お互いを訪問したり、ビデオ会議システムを使って交流をしたりしている。「英語を使ってオーストラリアのお友だちと話してみたい」という思いをもって学んでいる児童も多く、関係性への欲求を満たす要素となっている。英語で何をしてみたいかという質問紙調査に「会話」と答えていた児童が多く、他者との関わりの中で実際に用いてみたいという児童が多かった。

多読教材を導入してから、英語の4技能についてはどう変化しただろうか。表2は、2018年度～2020年度の6年生のGTEC Junior Plusの平均スコアである。多読教材導入期間が長いほど、聞く力のスコアは大きな変化は見られないものの、読む力と話す力が大きく伸びている。

年間20冊×年数、英語に触れた時間が長くなればなるほど、英語に対する理解度も高くなっている。

表2 6年生GTEC Junior Plusスコア比較

多読教材 導入期間	2年間	3年間	4年間
年度	2018年度	2019年度	2020年度
トータル	448.1/560	456.7/560	499.2/560
聞く力	128.2/140	124.2/140	126.1/140
読む力	115.2/140	118.4/140	134.6/140
話す力	97.7/140	108.1/140	123.9/140
書く力	107.0/140	106.1/140	114.7/140

VI まとめと課題

自分で、自分の成長が分かるとそれが喜びとなり、さらにもっとやってみたいという意欲が高くなる。6年間をかけて絵本の楽しさを感じながら、「この本を読んでみたい」という思い、「英語で絵本を読むことができた」という喜び、英語を用いて他者と話してみたいという願いをかなえる

環境を学校として整えていくことで、児童の内発的動機づけにつながる。

多読教材には、内発的動機づけとなる要素がたくさん含まれるが、内容が難しく、英語を苦手としている児童にとっては「分かって楽しい」と感じることはなかなか難しい。

質問紙調査で英語が好きかどうか尋ねた回答にネガティブに答えた児童は、「発音が難しいから」「何を言っているか分からない」と答えていた。現在、絵本のレベルは幅広く選べるようにしているが、他の人と違うレベルの本を選ぶことに抵抗がある児童もいる。そんなときにこそ、なかなか教員の手が行き届かない部分を補ってくれるデジタル教材を用いることで、大きな助けになるだろう。実際にデジタル教材を授業の中で使用していると、CDだと細かい巻き戻しができない部分も、ひと文ずつ、もしくは単語ずつクリックをすると発音してくれる機能を用いて、児童は繰り返し分かるまで、リピートできるようになるまで聞いていた。

英語に対して苦手意識がある児童は「有能さ」への欲求が満たされていない状態にある。つまりどこにあるのか見つけ、そこをサポートして少しずつ「できた」を感じられる環境を整える必要がある。

一人一台の端末をより効果的に用いることで、教員ができるサポート以上のことができる。書くことが苦手な児童は、端末を用いて入力することができる。イントネーションや発音の練習は、自分の声を端末に録音して正しい音声と聞き比べることができる。音声は、何度も繰り返し聞くことができる。

教員の働きかけに加え、端末を用いることで「自律性」、「有能さ」、「関係性」の欲求を満たすさらなる働きかけができれば、より内発的動機づけを高めることができるのではないだろうか。どのような使い方があるのか検証することが今後の課題である。

〈参考文献〉

- 1) エドワード・L. デシ リチャード フラスト. 人を伸ばす力ー内発と自律のすすめ. 新曜社. 1999. P.116-119
- 2) 櫻井茂男. 自律的な学習意欲の心理学 自ら学ぶこと

は、こんなに素晴らしい. 誠信書房. 2017

